



学位論文要旨

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科
菊地 靖 研究室
鈴木睦子 (4007S8001-7)

2007年9月25日

スリランカ紅茶産業の農園タミル人の社会開発：農園労働力から自立した人間へ — 市民社会の役割 —

スリランカは優れた人間＝社会開発指数を達成した国として世界で注目されてきた。それを財政的に可能にした紅茶産業を農園労働者として支えてきたのが「農園タミル人」(Plantation Tamil) という民族社会集団である。しかし、彼らの社会開発は長い間放置され、社会発展は遅れていた。移民から定住した彼らの多くは 1948 年のスリランカ独立後から 40 年の間、無国籍の「非スリランカ人」として差別されてきた。彼らは植民地時代に形成されたプランテーション経営の農園システムの劣悪な労働生活状況の中に置かれてきたが、教育レベルは低く、多くは低カーストであるため苦境を甘受してきた。さらに、民族対立などの社会情勢が悪化した中で直接的に暴力に晒されてきた。そのため、農園タミル人は人格をもたない農園労働力と見做されてきただけでなく、彼ら自身も自ら苦境を打開する力が無いと自己規定し、長い間農園の中に埋もれてきた人びとである。本研究は、農園タミル人に視軸をおいて、彼らが社会や経済が変革する中で主体性を取り戻すようになり、近年になって自立した人間として発展に向かい始めたダイナミクスを明らかにすることを目的にしている。

1992 年に政府は国際金融機関の支援を受けて農園部門民営化改革を開始した。民営化改革とその後の民営化改革推進事業の主要課題のひとつは、労働力と労働経費削減という労働政策であった。しかし、農園タミル人、特に青年の農園離れや自発的失業が進展し、将来的に農園労働力不足が問題として認識されるようになった。2002 年に新たに開始されたアジア開発銀行の農園開発事業では新しい労働政策が取られていることは知られている。アジア開発銀行は農園タミル人の自尊を尊重するための労働生活基盤の整備と社会開発を推進することは重要課題であると明記している。また、民営化改革によって形成された農園会社などは旧態の農園における労働管理制度を見直す動きとなった。

一方、先行研究はスリランカには古くから市民社会が形成されており、開発分野における NGO の役割と活動が拡大し、特に 1990 年の頃よりは市民社会は人権と平和構築の役割を担うようになっていることを論じている。人権を重視するスリランカの市民社会の動向は、農園タミル人コミュニティの人びとにも何らかの影響を与えていると考える。

本研究は、政府、農園会社、そして農園空間の市民社会による「社会開発」が、農園タ

ミル人の社会的貧困の緩和にどのように繋がっているかという問題に焦点を当て、以下の仮説を設定し、現地調査と関係資料に基づいて仮説を論証している。

「農園空間において国内 NGO が形成され、国際援助組織などとの協力により、NGO を主とする市民社会が形成された。政府や農園会社による社会開発と、市民社会による社会開発が相互に補完して、農園タミル人は心理的社会的な力をつけることが促された。

しかし、政府と企業による社会開発は農園タミル人を農園の労働システムの中に置くことを前提としており、彼らが人間として自立していく力をつける人間開発と連結していない。それに対して、市民社会は農園タミル人自身が社会の中で社会問題を是正する力をつけていくように人間発展を導く方法を進めている。その結果、農園タミル人は主体的に自己変革を試みるまでに発展するようになった。」

現地調査は4回（2000年8月、2002年3月・11月－12月、2003年7月－8月）行った。農園と農村が隣接し、農園タミル人の農園離れが進展しているといわれている中地のキャンディ県パンウィラと、農園タミル人が農園労働者のほぼ99%を占めており、彼らの農園離れはまだ進展していないといわれている高地のヌワラ・エリヤ県ノーウッドの2地域の5つの紅茶農園を中心に、定性的調査と定量的調査を行っている。

貧困は所得面による経済的貧困だけでなく、差別や偏見に基づく人間関係や社会関係に由来する社会的貧困がある。このような社会的貧困が緩和されるためには、人間を中心においた社会開発が推進される必要がある。本研究は、自分を無力と感じ、怯えなどを習性として身につけざるを得なかった農園タミル人が、「社会開発」を通じて、彼らのコミュニティ、農園組織、さらに広い社会の中における自己と他者との人間関係について、また、自己の存在について意識するようになり、主体的に自己変革を試みるまでに発展するようになっていることを明らかにし、「社会開発」の重要性について論じている。また、社会開発の担い手として、政府や企業と共に市民社会はその役割を担うことが求められているが、本研究は政府や企業と異なる、社会問題を考慮する「市民社会」の役割の意義を事例研究に基づいて論じている。

また、スリランカの民族紛争や暴動には関心を向けられてきたが、農園タミル人に対する暴力の問題には余り関心は向けられていないといえる。本研究では、差別や暴力に晒されながらも、彼らは「平和的」に発展への道を切り拓いていることを明示的に取り上げている。現地調査結果を分析し、暴動などが頻発している社会の中であって、彼らが「平和的」に発展に向かっている要因を考察している。